

7. 丹後半島・古代山寺調査の地元向け 説明会

菱田 哲郎・奥谷 三穂・山内 愛弓

1. はじめに

これまで、丹後半島における行者堂の調査から古代中世の山寺の探索へと検討を進め、2022 年度からは科研「古代後半期の山寺の総合的探索にもとづく仏教浸透過程の研究」の一環として、分野横断的な取り組みを進めてきた。丹後国では成相寺の草創が奈良時代に遡る可能性が発掘調査の成果から示され、古くから山寺が展開した可能性が考えられるようになっていく。そこを起点に金剛童子山周辺域において集中的に検討をこれまで進めてきた。こうした調査は地域とともに進める必要があり、地元向けの説明会を開催することとした。なお、説明会の翌日にも味土野を拠点に踏査を進めている。（菱田哲郎）

2. 説明会にいたる経緯

これまでの調査の大きな流れは二つあり、一つは成相寺の奥ノ院と言われる宮津市上世屋の慈眼寺を中心とした調査であり、もう一つは上世屋から山道伝いに行き来があった京丹後市弥栄町の味土野集落及び金剛童子山を中心とした踏査である。

慈眼寺調査では、「狭屋山縁起」（延宝 5 年（1677））の他、「寺籍簿」（明治 19 年（1886））1 冊、「済口誓約書」（明治 22 年）などを確認することができ、当時から成相寺の奥ノ院として認知されていたことが明らかになった。これについては 2020 年 11 月 22 日に上世屋地区において慈眼寺資料説明会をおこなうとともに『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第 7 号（2021 年）に記載した。

味土野調査では、『丹哥府志 下』（1763-1841）や『野間村郷土誌』（大正 6 年（1917））、『味土野誌』（平成 7 年（1995））などを基に、金剛童子山の開基の時期や弥栄町須川の洞養寺に安置されている釈迦如来像の由来を調査、検討した。また、地元の方の聞き取り調査を基に味土野の阿弥陀堂跡や聖神社跡の踏査を実施し、古くから金剛童子山とのつながりがあったことが明らかになった。中でも洞養寺の釈迦如来像については、『野間村郷土誌』に堂山の「七堂伽藍」に安置され天正年間に洞養寺に降ろされたとの記述があり、この仏像調査を藤岡穰氏（大阪大学）が実施した。また、「七堂伽藍跡」との関連が想定できる堂山と呼ばれる地点を中心に、京都府立大学考古学研究室が踏査を集中的に実施し、その成果は『聖地霊場の成立についての分野横断的研究』（2022 年）に記載がある。

これらの調査では、古文書などの文献の少なさや山中で遺跡・遺物を発見することの難しさに直面したが、地域の古道や廃村などに詳しい「丹後ひくやま会」のメンバーを案内人とし

て奥深い丹後の山々や廃村集落を踏査し、さらに地元の方々にも聞き取り調査を実施した。その結果、山寺の信仰を中心に人々が丹後半島の山々を行き来し、近隣の集落と山道伝いに交流しながら暮らしていた様子がわかってきた。こうした調査の経緯と中間的な成果を報告し、地域の皆さんと情報を共有し今後の調査の道標とすることとした。(奥谷三穂)

3. 洞養寺での地元向け説明会

2023年11月26日洞養寺(京丹後市弥栄町)において「洞養寺の仏像と味土野の『七堂伽藍』～調査成果報告～」と題して地元向け説明会を実施した(写真1)。当日は菱田哲郎による趣旨説明の後、洞養寺に伝来する仏像について藤岡穰氏(大阪大学)、丹後半島の山寺と味土野の七堂伽藍について奥谷三穂氏(京都府立大学)、金剛童子山中の寺院跡の踏査について溝口泰久氏(京都府教育庁)より報告がなされた。最後に菱田哲郎のもとでの座談会では地



写真1 洞養寺での発表の様子



写真2 洞養寺の仏像見学の様子

元の方々と交えた活発な議論が繰り広げられ、金剛童子山の寺院や信仰の実態を考える説明会となった。

当日は説明会の運営サポートを学生有志でおこない、今後の説明会の参考にするためにアンケートを実施した。その結果によると京都府各地から26名の来場者があり、そのうち半数以上の18名が京丹後市民であった。座談会において金剛童子山の由来や寺院の関係性についての質問が寄せられたことから、丹後半島の山寺に対する関心の高さをうかがえた。また、本説明会の舞台である洞養寺で開催したことで仏像を前に議論を交わしたり、洞養寺本堂や行者堂を視察する良い機会となった(写真2)。そして、この周囲に広がる金剛童子山の遠い過去に想いを馳せることができたことに大きな意義を感じさせられた。(山内愛弓)

4. おわりに

金剛童子山中の寺院跡については、味土野に伝わる「七堂伽藍」の伝承に加えて南斜面にあった廃村の高原の生蓮寺跡も重要な位置を占めている。討論の際に「金剛童子」という山名について質問もあり、仏教とりわけ修験と関わりの深い名称であることも改めて確認されており、山中に複数の寺院の存在も十分に考えられる状況である。このように中世の山寺の存在は次第に浮かび上がってきており、今後も集中して探索を続けていきたいと考えている。(菱田)

参考文献

- 京都府立大学文学部考古学研究室 2022 「丹後・金剛童子山中の山寺探索調査」『聖地霊場の成立についての分野横断的研究』京都府立大学文化遺産叢書第25集 京都府立大学文学部歴史学科
- 菱田哲郎・稲穂将士・奥谷三穂・鶴岡衛大 2021 「丹後半島における修験場等山寺跡に関する調査報告」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科

編集後記

フィールド集報の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの考古・建築・地理・文化情報の合同実習メニューとして学生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっている。

今年度は、3年ぶりに多様な場所・フィールドで調査をおこなうことができた。調査時だけでなくその後の作業においても多くの方々からご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。

海外の調査も徐々にではあるが再開されるようになった。来年度はまた違うところに行きたいと思う今日この頃である。(き)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第10号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2024年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
